

ロボット手術

我孫子東邦病院

泌尿器科部長 上原慎也

岡山大学を卒業後、泌尿器科に入局し、尿路結石に対する内視鏡手術や腹腔鏡手術を中心に研鑽していましたが、2004年、実験関連で訪れた米国の大学で偶然「ダ・ヴィンチ サージカルシステム」(以下ダ・ヴィンチ)を使った前立腺全摘除術を見学する機会に恵まれたことから、ロボット手術に興味を持つようになりました。精度の高さ、出血量の少なさに感激し、「将来、日本でも、この手術が主流になる」と実感しました。しかしながら、日本では導入される気配が全くなく、2007年にしびれを切らして、当時アジアで最もロボット手術が盛んに行われていたシンガポールに、無給のclinical fellowとして臨床留学し、「低侵襲手術」に特化したトレーニングを受けてきました。怪しい英語を操る中年の日本人相手に、惜しげもなく技術を提供していただいたこと、異国の地で誰の助けもなく生活の基盤を作り度胸がついたことが、現在の基礎となりました。2010年に、岡山大学病院にダ・ヴィンチが導入され、泌尿器科領域のロボット手術の責任者として経験を積んだ後、2012年4月より我孫子東邦病院でロボット手術を実施している次第です。

ダ・ヴィンチは、いわば腹腔鏡手術の進化版で、従来の腹腔鏡手術の欠点、つまり二次元画像および鉗子先の自由度の制限などを克服するべく、鮮明な拡大三次元画像と多関節を有する鉗子などを備えた医療用ロボットで、実際に手術をしていると、映画「ミクロの決死圏」の如く、患者の体内に自分が入って手術しているような錯覚に陥ります。

平成24年4月から、前立腺癌に対する前立腺全摘除術のみに対し、保険適応となっています。従来、前立腺全摘除術は、前立腺の解剖学的な特徴から、多量の出血や術後の失禁、性機能障害などが大きな問題となっていました。ダ・ヴィンチは、良好な三次元視野と高性能な鉗子を用いることにより、出血量の減少や機能の温存が期待されており、実際、これまでの約100例の経験でも輸血を要した症例はなく、また、失禁や性機能の保持、更には、癌の治療で最も大切な治癒切除に関しても、従来の手術法に比べ大きく改善していると実感しており、非常に質の高い手術

が可能です。長年の試行錯誤から生まれた独特のノウハウを活かして、小規模病院でありながらも大学病院レベルの手術ができていると自負しております。

近い将来には、婦人科、消化器、更に循環器領域においてもダ・ヴィンチが保険適応となり、普及することが予想されます。欧米やアジア各国に比べ、大きく遅れをとった本邦のロボット手術が、近い将来、色々な領域で追いつき、追い越せるものと信じ、日々精進しています。

我孫子東邦病院泌尿器科は、「低侵襲治療」を最優先のコンセプトに掲げ、得意分野である、難治性尿路結石に対する内視鏡治療、腹腔鏡手術、ロボット手術を柱として、質の高い医療を提供する所存でございます。我孫子市医師会会員の先生方におかれましては、該当の症例がございましたら、是非ご紹介くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

末筆ながら、我孫子市医師会の、益々のご発展を祈念いたします。

